

イラクサ科ヤブマオ属の多年草。本州以南の野原、林縁、河川敷、道端、畦畔や休耕地などのやや湿ったところを好む。茎はほぼまっすぐに立ち高さは1m～1.5m、短い寝た毛を密生する。葉は広卵形で互生し、長さ9～15cm。縁には鈍鋸歯があり、裏面は白い。花期は8月～10月。葉柄の根元に小さな花が房状につく。雄花と雌花があるが雌雄同株で雄花序は茎の中ほどから下の方につき、雌花序は茎の上の方につき。風媒花で風によって花粉が運ばれ、花粉症の原因の一つともいわれる。

カラムシは有史以前から繊維用として栽培されてきたものが逃げ出した史前帰化植物とされ、縄文時代の遺跡からカラムシの種子、編物、織布などが見つかった。また、日本書紀には持統天皇が苧（カラムシ）の栽培を奨励していたことが記されている。カラムシから縮が織りあげられるが、それには相当な手間を要する。収穫したカラムシの茎を水に浸してから1本ずつ皮を剥ぎ、剥いだ皮からさらに外皮を剥ぐ苧引きを行い、乾かしてカラムシ繊維として保管する。この繊維を細かく裂き、糸として指でつないでいく。この作業が苧績みで根気のいる仕事であり、その糸に撚りをかけ丈夫な糸に仕上げる。この苧引きから糸に仕上げるまでが大変な仕事で、この大変さを民話の鬼婆にたとえたこんなお話がある。

昔の東北のとある村のことである。

村に父と母と娘が住んでおった。家は貧乏で、父と母は三つ離れた街まで働きに行った。娘は一人で家におった。

娘は父と母が帰ってくるまでに苧の糸玉をこさえておこうと思つて、夜遅くまでせつせと働いていた。

するとある晩、窓をバタバタと叩く音がして、「むすめえ～～」という声をした。

誰だろうと思つて娘は窓のところへ行つた。するとそこには鬼婆がおった。そして、

「むすめえ、その苧をよこせ～」と叫んで窓から入ってきた。入ってくると苧引き作業をしていた娘から苧を取ってしまつてむしゃむしゃと喰つてしまった。

娘は恐ろしくなつて泣き出した。すると鬼婆は、「こら、娘。わしの側へ来い」と言つて、娘の手を引っ張つた。

何をされるのか、と娘はぶるぶる震えておつたが、鬼婆は、「いまに、わしの臍から糸が出るで、玉に巻け」といった。

娘はおっかなくてびくびくしながらも鬼婆の臍へ手をやった。すると糸がぺろぺろと出てきた。娘はその糸をぐるぐると巻いて糸玉をこさえた。糸玉は瞬間に山のようになった。

夜中頃になって鬼婆は、「これで終いだ」と言つて、着物で臍を隠した。

鬼婆はどっこいしょつて言いながら腰を伸ばして立ち上がり、「泣く童子は居ねがあ～」というとな娘は、「おらあ、童子じゃねえ～」と答えた。

鬼婆はそれを聞いて、また窓から出てどこかへ行つてしまった。

次の日の晩、鬼婆がまたやつて来た。また、臍から糸を出して、娘は糸玉をいっぱいこさえた。

次の晩も、その次の晩も来て、十五晩も来た。娘の家の中は糸玉でいっぱいになってしまった。

「明日の晩からは来ねえから、その糸玉で着物を織つて、父と母にあげろ。お前は親孝行で優しいからおらが手伝つてやつただ」

鬼婆はそう言つてさつと消えてしまった。

娘はそれから一生懸命に機を織つて、父と母の帰りを待った。帰つてきた父と母は娘の織つた縮に大喜びし、娘に婿をもらつて4人仲良く暮らしたそう。しかしその後、娘もその婿も、苧の糸玉をこさえたかどうかは定かではない。

